

近江の荒れたる都に過る時に、柿本朝臣人麻呂の作る歌

二九番

玉だすき 畝傍の山の 榎原の ひじりの御代ゆ 或
は云ふ「宮ゆ」 生れましし 神のことごと つがの木
の いやつぎつぎに 天の下 知らしめししを 或は
云ふ「めしける」 天にみつ 大和を置きて あをによ
し 奈良山を越え 或は云ふ「そらみつ 大和を置き あ
をによし 奈良山越えて」 いかさまに 思ほしめせか
或は云ふ「思ほしけめか」 あまざかる 鄙にはあれど
いはばしる 近江の国の 楽浪の 大津の宮に 天の
下 知らしめしけむ 天皇の 神の尊の 大宮は
ここと聞けども 大殿は ここと言へども 春草の
しげく生ひたる 霞立ち 春日の霧れる 或は云ふ
「霞立ち 春日か霧れる 夏草か しげくなりぬる」 も
もしきの 大宮所 見れば悲しも 或は云ふ「見ればさ
ぶしも」